

腑抜けの暴力

崔真碩

現在の日本社会に蔓延している暴力があるとすれば、それは腑抜けの暴力とでも呼ぶべきものであるように思う。それはふたつある。ひとつは、日本政府とマスメディアが一体となって行っている北朝鮮バッシングにおけるそれであり、もうひとつは、世界的な不況下で新たに立ち現れている人種差別主義におけるそれである。

それらは別々の事象であるけれども、朝鮮人である私の身構えにもとづいて言えば、そのふたつは今ここで同時に知覚感覚されている暴力である。それらはいくまでも腑抜けのただけで、腑抜けの暴力が常態化してこの社会の空気と化した時、再び、とりかえしのつかないことが起きるかもしれない。私たちが生きるこの社会の未来を案じる。私は表現者として、ひとりの大人として、未来の子供たちに恥じない社会を作りたい。それがこの社会に生きる者としての最低限の務めだと思う。

この文章は、いま私が知覚感覚しているふたつの腑抜け

の暴力を言葉化するための断章である。ささやかではあるけれど、私なりに、今ここにある暴力を可視化するための距離としての言葉を求めたいと思う。そして、この社会における歴史感覚と政治感覚の再生とともに、今ここにある暴力を解く契機を見出したいと思う。

一 「ミサイル」から「新型インフルエンザ」へ

二〇〇九年四月五日、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）が人工衛星を打ち上げた。それは、日本の領空権が及ばない数百キロ上空の宇宙空間を飛行するもので、国際法上すべての国家に認められている宇宙平和利用の権利にもとづいたものだった。しかし、日本のマスメディアはそれを端から「ミサイル」と名付けて報道し続けた。

発射台にロケットが据えられて先端部の形状が明らかになった最初の段階で、軍事技術の視点から複数の軍事

評論家は、それは人工衛星の打ち上げを目的としたものであると指摘していた。弾薬を積んだミサイルなら、大気圏内に再突入し目標に向かう際の加速性を重視して先端部を円錐形にするのに対して、人工衛星を積んだ場合には先端部が丸くなっているからだ。しかし、マスメディアはそうした見解に目を向けないまま情報を垂れ流し、日本政府もまた過剰に危機を煽るマスメディアを積極的に規制しようとはしなかった。

日本とは対照的に、北朝鮮と地続きの韓国では、『朝鮮日報』や『東亜日報』などの保守メディアでさえ、それを「人工衛星」あるいは「ロケット」と呼び、「ミサイル」と名付けることはしなかった。無駄に危機を煽ることが、そのまま戦争に繋がってしまう恐れがあることを、身をもって知っているからだ。

記憶に新しいところであるが、日本政府、地方自治体、マスメディアは一体となって北朝鮮の「脅威」を過剰に煽り続け、人工衛星が上空を通過する地域にパトリオット・ミサイル（PAC3）を配備し、有事に戦争体制を具体的に作り上げていった。さらに、今では死語になりつつあるのかもしれないが、「敵基地攻撃論」なる言葉まで現れていた。さすがに、この言葉は空振りしたようだが。

「ミサイル」や「敵基地攻撃論」といった文字通り攻

撃的な言葉で過剰にまで「脅威」を煽り、まるで「脅威」を渴望しているような日本政府とマスメディアは、北朝鮮に対してのみならず、強引なやり方で恐怖心を抱かせ煽動しているという意味で、日本国民に対しても暴力的であると言えないか。たとえば、あの時、公の場で「それはミサイルではなくて人工衛星です」だとか、あるいは「私は北朝鮮が恐くないです」と堂々と言うことは、果たして容易なことだったろうか？ それは「非国民」であることを意味しなかったか？

しかしながら、「ミサイル」問題をめぐる「脅威」の煽動において私が驚かずにいられなかったのは、そうした日本政府とマスメディアのやり方ではなかった。四月末に「新型インフルエンザ」の問題が生じた時、まるでテレビのチャンネルを変えようにして、日本政府もマスメディアも一斉にそちらに方向転換したのだった。単に方向転換しただけではない。「新型インフルエンザ」の「脅威」を過剰なくらいに煽り出す、その「脅威」の煽り方が北朝鮮の「脅威」の煽り方とまるで同じで、「脅威」の対象が「ミサイル」から「新型インフルエンザ」へと横滑りしていったのだった。あたかも、「脅威」を煽ることさえできれば、対象は何でも構わないとでもいうような印象を受けざるをえなかった。

そうして、五月にはもはや、「ミサイル」問題は「新

暴力燦燦

型インフルエンザ」問題によってすっかりかき消されていった。五月末に北朝鮮が二回目の核実験を行ったことを受けて、北朝鮮の「脅威」の煽動は再燃し、さらには金正日総書記の後継者問題をめぐってワイドショー並みのレベルで情報垂れ流し状態が現在までも続いている。しかし、これらの動向を見ていると、「脅威」を煽っているもの、もはやその熱は冷めてしまった感がある。

四月からこれまでの日本政府とマスメディアの動向を見ると、二〇〇二年九月一七日の日朝首脳会談で拉致問題が発覚した時、二〇〇六年一〇月九日の北朝鮮が一回目の核実験を行った時と、今回の一連の出来事が日本社会に与えた「脅威」との落差に気づかずにはいられない。明らかに、日本社会で変化が起きているのだ。

端的に言えば、日本社会は実のところ、北朝鮮を恐れていないのではないか。日本政府とマスメディアが煽るほどには、もはや北朝鮮に対して「脅威」を感じていないのではないか。かつての安倍政権ですらその「脅威」を利用して支持率を上げたのに対して、当時の麻生政権が支持率を上げることができなかったことは、日本社会がもう北朝鮮を恐れていないことを示しているようだ。あの手この手を使って「脅威」を煽り続ける大手新聞をはじめとするマスメディアは、広告取りのため商

業主義に走っている様を露呈しているが、見方を変えれば、マスメディアの必死な様もまた、現在の北朝鮮の「脅威」にはかつてほどの情報としてのインパクトも値打ちもなくなりつつあることを示しているようだ。

北朝鮮に対して緊張しているポーズを取ってはいらぬものの、まったく緊張していない。所詮、それは鉤括弧付きの「新型インフルエンザ」に取って代えられてしまうほどのものなのだ。二〇〇二年、二〇〇六年の段階と現在が違うのは、日本社会はもはや、過剰に煽り出された「脅威」をも含めて、北朝鮮の「脅威」に慣れてしまっただし、もっと言えば、飽きてしまったのではないだろうか。そして、それは同時に、日本社会は北朝鮮のことを「知っている」ということもある。

翻って考えてみれば、戦後の日本社会において、大衆レベルで、現在ほど北朝鮮のことを「知っている」時期はなかったのではなからうか。（「脅威」を互いの体制維持・政権維持のための道具にしている意味で）北朝鮮と日本との敵対的な共犯関係が続くなかで、大衆レベルで、北朝鮮に「触れる」機会がこれほど多かった時期はなかったのではないか。

さらに、こうは考えられないか。情報が過剰に報じられても何ひとつ知りえない範囲内で、北朝鮮のことを「知っている」現在の日本社会は、これまでで最も日

朝国交回復に近い位置にいと。北朝鮮に対する過剰な「脅威」と「緊張」が弛緩した現在の状況を逆手に取れば、敵対的な共犯関係を通じて進む日朝間の「交流」もまた、グローバルゼーションの一環であり、歪んだ形で国交回復が進展していると。国交回復への意志がある・ないにかかわらず、北朝鮮はすでに日本社会に到来するその過程にある。いまだ、情報が過剰に報じられても何ひとつ知りえない範囲内ではあるものの、それはすでに始まっていることなのだ。

日本社会でいま起きている変化として看過できないことがもうひとつある。それはこれまでとは異なり、現在の日本社会はすでに自らの矛盾を知っているということだ。パトリオット・ミサイル（PAC3）は短距離間における迎撃能力の限界を露呈し、それに一兆円もの金を注ぎ込んでいることの意味が問われないようにするためにも、また雇用対策や医療・福祉・教育に金を回せと言わせないためにも、北朝鮮の「脅威」は過剰に描き出さざるをえないということ。（同盟国として日本も包摂されている）米国軍事資本主義システムの動力として北朝鮮の「脅威」は是が非でも必要であるということ。その矛盾。

そして、北朝鮮の核問題を批判するものの、近年明らかに年々つつある、一九六〇年の日米安保条約締結時の

「核密約」の存在は、戦後に「ヒロシマ」「ナガサキ」を通じて自国の被害者性や「平和」を唱えてきたことの虚構性を暴くとともに、北朝鮮の核問題を批判することの限界を露呈してもいる。徹底的にタブー化してそのことをしかと認識するには至っていないのかもしれないが、しかし少なくとも、「核密約」の歴史的事実が報道されはじめている以上、日本社会はすでに自らの矛盾に気づきはじめているし、もはやその事実から逃げられないだろう。

北朝鮮の核問題を批判する前に自らを問うべきであることに気づきはじめているからなのかどうかはわからないが、過剰に煽られてきた北朝鮮の「脅威」は弛緩し、これまで右傾化の動力となってきた日本社会における北朝鮮に向けられた暴力が腑抜けになってきている。腑抜けの暴力をもって、情性で北朝鮮をバッシングしているようだ。なぜ、日本社会は、いかなる歴史感覚も政治感覚も持てないまま、情報が垂れ流されるままに受け止め、腑抜けの暴力をもって北朝鮮と向き合うことしかできないのか。

「ミサイル」関連で、もうひとつ後日談がある。二〇〇九年八月二五日、韓国は、ロシアの協力で開発した初の人工衛星搭載ロケット「羅老号」を南西部の羅老宇宙センターから打ち上げた。打ち上げの約九分後に先端の

暴力燦燦

試験科学技術衛星を分離したが、目標軌道への投入に失敗した。

そもそも、この失敗に終わった人工衛星搭載ロケットの発射計画を韓国政府が発表したのは、四月中旬のことだった。つまり、北朝鮮が人工衛星を打ち上げて半月も経たないタイミングにおいてであった。その時、韓国の人工衛星搭載ロケットが九州南西部から沖縄本島方向に打ち上げられることが明らかになったのだが、日本政府は、日本の領空権が及ばない数百キロ上空の宇宙空間を飛行するもので「宇宙の平和利用であるのは明らか」だから、発射を静観する方針であることを発表していた。マスメディアもまた、日本政府の動向と対応するようになり、韓国側の発射計画の件そのものを小さく目立たない扱いで済ませていたし、新聞においては国際面のベタ記事でしかなかった。

韓国による人工衛星打ち上げ失敗の件に関しても、日本のマスメディアは小さく目立たない扱いで済ませた。当然のごとく、韓国の人工衛星搭載ロケットのことを「人工衛星」「ロケット」と呼んで報道したし、北朝鮮による人工衛星打ち上げとは異なり、けっしてそれを「ミサイル」と名付けるようなことはしなかった。発射コースに関してまったく触れなかった。

やはり、北朝鮮による人工衛星打ち上げの報道との落

差に驚かずには、いや、呆れずにはいられない。「羅老号」打ち上げをめぐる北朝鮮外務省報道官は八月一日、「南朝鮮（韓国）の衛星打ち上げも国連安全保障理事会に上程されるか注目している」とコメントし、北朝鮮が四月に「人工衛星」と主張してロケットを発射したのに対し、国連安保理が「安保理決議違反」と非難する議長声明を採択したことを踏まえ、皮肉ついていた。当然のごとく、国連安保理は、韓国の「羅老号」打ち上げをめぐることはこれといった特別な対応をしていない。この落差はいったい何だ？ 国連安保理とはいったい誰のためのものだ？

日本政府、日本のマスメディア、そして国連安保理の対応の落差からこぼれ落ちているのは、なぜ、韓国が、北朝鮮が人工衛星を打ち上げて半月も経たないタイミングで人工衛星搭載ロケットの発射計画を発表し、当初の計画よりも遅れはしたものの八月末に人工衛星搭載ロケットを発射したのかということだ。つまり、韓国と北朝鮮はいまだに緊張関係にあること、朝鮮戦争が終わらないままに南北朝鮮は分断体制にあることに対する認識がまるでないのだ。韓国が保守政権に代わり、これまでの太陽政策の成果が雲散霧消しながら、再び南北の緊張が高まっている。朝鮮半島において冷戦はいまだ終わっていない。だから、韓国は北朝鮮に対抗して北朝鮮が成

功した人工衛星搭載ロケットを打ち上げ、国家の威信をかけて是が非でも成功させなければならなかったのだ。ロシア、かつてのソビエト社会主義共和国連邦がそれに協力しているのは、悲しいかな、歴史の皮肉でしかない。

二 人種差別主義者へ

二〇〇九年四月一日、埼玉県蕨市で、日の丸を手にした百人ほどの一群が、両親が国外退去処分を受けた在日フィリピン人のカルデロンのり子さんの通う中学校に「犯罪外国人・犯罪助長メディアを許さない国民大行進」なるデモンストレーションをかけた。「犯罪一家を日本からたたき出せ」の聲が響いた。当時、カルデロンのり子さんは校内にいたという。怒りを通り越して、恥ずかしさすら覚える。

デモンストレーションをかけた彼／彼女らは、「在日特権を許さない市民の会」と名乗る人種差別主義者たちである。その後も、彼／彼女らは、五月二日に「外国人参政権断固反対 全国一斉デモ」（札幌、東京・渋谷、名古屋、福岡）を皮切りに、在日朝鮮人が集住する京都のウトロ（六月一三日）で、大阪の鶴橋（七月一八日）で同趣旨のデモンストレーションを行っている。彼／彼女らは一見、普通の市民だ。「恐慌とファシズム」——そんな古ぼけた命題が頭の片隅を横切る。世界的な不況

下においてファシズムや外国人差別が肥大化した歴史を思い起こす時、いま立ち上がっている新たな（しかしあくまでも古臭い）人種差別主義を見過ごすことはできない。

そもそも「在日特権」なるものがいかなる根拠もないことは言うまでもない。それは、妄想でしかない。世界的な不況下で自分たちの利権が脅かされることに怯えるなかで捏造された妄想でしかない。もつと言えば、自分たちの特権を与えて欲しい欲求が満たされない欲求不満のはけ口としてエゴイステックに捏造された妄想でしかない。彼／彼女らは、あくまでも妄想的なかで生きており、現実存在する在日朝鮮人の一人一人とは、その妄想を共有し合える仲間集団と一緒になければ向き合えない、けつして一対一では向き合えないだろう。一対一で向き合い、在日朝鮮人の歴史とその生活の現実を知った時、彼／彼女らの妄想はたやすく覚めてしまうだろうから。だから、彼／彼女らの人種差別主義がはらんでいく暴力は、腑抜けなのだ。

世界的な不況下のなかで立ち現れている人種差別主義の現象から想像的に読み取るべきなのは、下層の若者たちの不満が、あるいは自分も下層に転落するかもしれないという予感と怯えが、外国人差別・排除に向かってしまっているということだ。社会のなかで直接に排除の暴

暴力燦燦

力を被りながら、あるいは間接に排除の暴力を目撃しながら、その暴力を内面化してしまっている若者たちが、その暴力を解決する術を知らないまま、その暴力の行き場のないままに、それを他者に向けて表出することで自己のバランスを取っている。ひよつとして、彼／彼女らはもはや、国民として存在していない、棄民であるかもしれないにもかかわらず、いや、だからこそ、外国人を差別・排除し人種差別主義に走ることで、日本人としての自己同一性を必死になつて確認・保全しようとしているのかもしれない。

たとえば、カルデロンのり子さんに向けられた「犯罪一家を日本からたたき出せ」の声は、一方で、「日本人である私たちが日本からたたき出さないで」という、国民としてもはや存在していない、棄民であるかもしれない彼／彼女らなりの悲痛の叫びのようでもある。つまり、「在日特権」なる妄想をもつて在日朝鮮人を、外国人を排除せんとする彼／彼女らもまた、この国ではいわば「在日」であり、「外国人」なのかもしれないのである。彼／彼女らは鏡に映った自分の姿がそのように見えている、あるいはこの国で自らが「在日化」すること、「外国人化」することを予感しているのではないか。

いま内面化している暴力を他者に向けて表出するのはなく、その暴力と対峙して共に闘うために、私は彼

／彼女らのもとへ、一九三二年にブラジルに単身で移民した日系ブラジル人の故紺野賢一さん（一九二二—二〇〇九）の言葉を媒体となつて届けたいと思う。壮絶でありながら、いや、だからこそ人間的なユーモアに満ちた一生を送られた紺野さんの生き様を綴ったドキュメンタリー映画『ブラジルから来たおじいちゃん』（栗原奈名子監督、二〇〇八）は、私たちの生きる近代が戦争と貧困に翻弄されながらの移動・移民の歴史であつたことを、紺野さんがブラジルの彼方此方を、日本の彼方此方を歩き続けてきた／いるその足もとを追いながら表現している。

このドキュメンタリー映画には、世界史的な視野にもとづいた紺野さんの叡智が繊細に込められているのだが、この映画とは別の場所、二〇〇九年一月一七日、大阪の第七芸術劇場での上映後に行われたスカイプを通じたのライブトークで、紺野さんは次のおしやつた。正確に言えば、以下の原稿化されたメッセージを読み上げられた。その四カ月後の五月一日に亡くなったことを考えれば、これは紺野さんのいわば遺言である。

さて、翻つてブラジル移民が言語の通じない風俗習慣の全く異なる遠く離れた異国で必死になつて生きて来たことだろうと想像され同情して下さるならば、デカ

セギの人々を軽蔑せず暖かい思ひやりの心を持つて接してやって頂きたいとお願ひする次第です。

(紺野さんからのメッセージ)

<http://anky.org/senhordobrasil/romkonno.html>

紺野さんは聴衆たちに向かって、日系ブラジル移民の生の在り方を通して、現在日本に出稼ぎに来ている日系ブラジル人の存在を見つめ直すことをお願いしている。この言葉に日本に出稼ぎに来た日系ブラジル人を「軽蔑」し、「暖かい思ひやりの心を持つて接して」いない日本社会の現状に対する認識と批判が暗々裏に込められていることは言うまでもない。もつとも、この言葉には、紺野さんのしわの深さや温かな表情と同じように、苦しみや悲しみといった感情がすべて溶けて表れているから、それはもはや「批判」という次元ではなく、達観した穏やかなまなざしによるものなだけだ。

紺野さんのこの言葉は、日本に出稼ぎに来た日系ブラジル人のことを念頭に置いて紡がれた言葉である。しかし、日系ブラジル人の出稼ぎ労働者のことを「デカセギ」とあえてカタカナで表記されてもいるように、それはけっして日系ブラジル人に限定された言葉ではなくて、もつと普遍的な視野で紡がれている言葉であるように思う。つまり、この言葉は、日系ブラジル人をはじめとす

る在日外国人を差別・排除する日本社会に対する警鐘であり、在日外国人を差別・排除する日本社会の閉鎖性を開くことへの願ひなのではないだろうか。紺野さんは続けてこうもおっしゃっている。「そして移民の集まりであるブラジルで我々が軽蔑されず人種差別も受けず社会の各部門に進出して楽しく幸福に家庭を持つて暮らしていることを思ひやって暖かくデカセギの人々を迎へ入れてやって頂き度いとお願ひする次第です」と。日系ブラジル人と共にこの社会に生きてきた／いる人間として、私は、誤読を恐れずに、紺野さんの言葉をそのように受け止めたいと思う。

「在日特権を許さない市民の会」に共鳴している人種差別主義者たちは、日本人として外国人を差別・排除するのであれば、まずもって、「ブラジルから来たおじいちゃん」の声に耳を傾け、日本人の過去と現在の歴史を知るべきだ。日本人もまた移動・移民の歴史としての近代に生きているということ。日本人がブラジルという異国でより良い暮らしを求めて必死になって生きてきたということ。そして、自分が日本人でありながら、ほかでもない〈日本の資本主義体制〉のなかで棄民としてすでに棄てられているかもしれない、あるいは棄民として棄てられることになるかもしれない時代に生きていることを知るべきだ。自分が被っている暴力を他者に向けて表

暴力燦燦

出するのではなく、その暴力と対峙して共に闘うこと。この時にはじめて、他者との共生の道は開かれるだろうし、自己救済の道も開かれるのではないだろうか。むろん、彼／彼女らにしてみれば、余計なお世話かもしれないのだけれど。

三 朝鮮戦争と出遭い直す、あるいは朝鮮戦争を日本化する

北朝鮮への情性化したバッシングが続き、新たな人種差別主義が立ち現れるなかで発動している、今ここに

ある暴力と対峙する時、日本社会においては、いかなる歴史感覚も政治感覚も死んでしまったことを今更ながらに痛感する。同時に、それは他者への想像力の枯渇を意味している。在日朝鮮人に対する日本社会の無知に至っては、「在日特権」なる妄想が現れるまでに深刻化している。むろん、「在日特権」を妄想している彼／彼女らは日本社会では極々少数派だ。しかし、彼／彼女らの妄想に対して、どれだけの人々が真っ向から対抗できるだろうか。この「在日特権」なる妄想が広まるのを防げるだけの、在日朝鮮人と向き合うための知が日本社会に無いのもまた事実である。

ところで、日本社会における歴史感覚と政治感覚は、いつ、どうやって、これほどまでに死んでしまったのか。そのことを真摯に問うてみる必要があるように思う。そ

のためには、まずもって、今日の日本社会と北朝鮮との関係の起源にさかのぼり、また在日朝鮮人の起源にさかのぼり、北朝鮮と向き合うための、在日朝鮮人と向き合うための歴史感覚と政治感覚を再生しなくてはならない。それはすべからず、日本で「戦後」と呼ばれる時代が始まるのと同じ時期、かつて日本が植民地支配した朝鮮半島で起きた朝鮮戦争、北朝鮮の成立の起源であり、在日朝鮮人の起源でもある朝鮮戦争との出遭い直しを意味している。

この現在の日本社会に蔓延している腑抜けの暴力を解くための契機を見出すべく、日本社会とはすでに切れてしまった朝鮮戦争の過去と現在の歴史をたどり直してみたい。あくまでも、朝鮮戦争を日本社会との関係に即して再考しながら両者を繋げ直す、言うなれば、「朝鮮戦争を日本化する」という観点のもとで。同時に、それは戦後日本社会の成り立ちをたどり直すことにもなるだろう。まぎれもなく、朝鮮戦争の痕跡のうえに「戦後」「日本」「社会」はあるからだ。

しばしば枕詞のごとく「忘れられた戦争」と呼ばれるように、日本社会では朝鮮戦争がすっかり忘れ去られた感があるが、あえて指摘するまでもなく、戦後日本の復興の直接的な契機は朝鮮戦争にある（朝鮮戦争特需）。冷戦構造形成期、米帝国主義の世界戦略に追従し、か

つて植民地支配を行った土地を戦場にして起きている戦争の兵站基地として軍需物資を生産・提供しながら、米国の戦争を支援するなかで戦後日本は復興を遂げた。

朝鮮戦争における虐殺、五人に一人が亡くなったとされる朝鮮人の死者の犠牲のうえに成り立っているのが、戦後東アジアにおける〈日本の資本主義体制〉の起源であり、その基本的な在り方である。周知のように、その在り方は朝鮮戦争休戦後も変わらず、ベトナム戦争時也是如此であったし（ベトナム戦争特需）、また戦後東アジアにおける〈反共の砦〉としての軍事独裁政権下の韓国という隣国の存在に守られるようにして、日本社会の安定は保たれ、戦後日本は経済大国となった。

一九八〇年の光州事件当時においてもそうであったし、その後の八〇年代においても、韓国民衆が朝鮮戦争の残した否定的遺産である極右反共主義の狂気に苦しめられれば苦しめられるほど、皮肉にも、〈反共の砦〉が堅持されるなかで日本社会の安定は保障され、日本マクドナルドの展開や国鉄の民営化等々、そしてあの頃よく眼にした『MADE IN KOREA』——戦後日本は、東アジアでどこよりもいち早く経済の新自由主義化を遂げた。戦後日本の復興・発展を東アジア化して捉えれば、日米は、冷戦構造形成期に起きた朝鮮戦争時から一貫して、冷戦下にある戦後東アジアで資本主義的市場経済を

安定的に展開するうえで、〈反共の砦〉としての軍事独裁政権下にある韓国（民衆）の犠牲を必要としていた。占領下にある沖縄と同様に、日米にとつてそれはいわば捨て石のごとき存在であり、だから、朝鮮戦争を忘れ去ることができ、いやむしろ、戦後日本社会の誕生を支えた〈日本の資本主義体制〉の起源であるゆえに忘れ去る必要があったのではないだろうか。

きつと、このいまだ終わっていない朝鮮戦争を忘却する際のマジックワードとして日本社会で機能し続けてきたのが、「戦後」という言葉であると思う。この「戦後」という言葉が当たり前のように繰り返されれば繰り返されるほど、戦中にある朝鮮半島や沖縄の存在は忘却され、その犠牲を動力とする〈日本の資本主義体制〉の成長を促してきた。

飛躍を恐れずに言えば、「戦後」という名の忘却こそが、日本人の在り方を規定し続けてきた／いる生活感覚のように思われる。当たり前のように「戦後」あるいは「平和」を生きていると錯覚し続ける限り、日本人は朝鮮戦争を知りようがないからだ。日本社会で朝鮮戦争は風化したのではない。〈日本の資本主義体制〉の在り方として必然的に、構造的に忘却され続けてきた／いるのである。

ひとつ付言すれば、「憲法九条」の問題がある。日本

暴力燦燦

の市民運動として展開されている「憲法九条」を守るための活動・議論においても、朝鮮戦争に対する歴史認識が抜け落ちていることにもどかしさを覚えるのは私だけだろうか？ 「憲法九条」について考えるうえで大前提としなければならぬことは、「憲法九条」があつたから戦後日本社会は「平和」だったのではない、ということだ。戦中にある朝鮮半島と沖繩の犠牲、朝鮮戦争における虐殺と沖繩の軍事占領のうえに戦後日本社会の「平和」が守られてきた／いるという当たり前の歴史認識が求められていると思う。そのことをしかと受け止め、戦中にある朝鮮半島と沖繩に向かって「憲法九条」を応答として投げかけた時、はじめて「憲法九条」における「平和を希求する」という言葉はその輝きを取り戻すことだろう。

このように、〈日本の資本主義体制〉のなかで構造的に切れている戦後日本社会といまだ終わっていない朝鮮戦争とを繋ぎ直すには、どうしたらいいのだろうか。ある意味で朝鮮戦争を知ることが最も困難である、この戦後日本社会といまだ終わっていない朝鮮戦争を繋ぐ回路は、果たしてあるのだろうか。

私はこちらで、韓国の社会学者・金東椿^{キムドンチュン}氏が歴史的名著『朝鮮戦争の社会史 避難・占領・虐殺』（金美恵ほか訳、平凡社、二〇〇八）の最後で提示している、朝

鮮戦争における虐殺を普遍化して捉える視点に共鳴しつつ、そのヒントを探したいと思う。それは、朝鮮戦争における虐殺を排除と捉える社会科学の視点である。金東椿氏は、朝鮮戦争における虐殺を現在に至るまで世界資本主義体制が再生産している問題系として捉えながら、次のように書いている。

概して戦争と貧困は、人間を動物の水準に転落させる、近代文明最悪の二大災難であると見ることができ、前者の場合は、おおよそ国民あるいは民族のためという大義名分のもとで政治権力によって行われ、後者の場合は資本主義的市場経済とそれを支える国家の経済政策によって助長される場合が多い。両者は別個のもののように見えるが、世界資本主義体制、国家間(inter-nations)システムの枠内で見れば、同じ両親が生んだ兄弟のようなものである。結局五〇年余り前に朝鮮戦争の過程で民衆が受けた悲惨さと人間の尊厳の毀損は、今日の私たちの社会に残存する野蛮の痕跡、すなわち極右反共主義の狂気、疎外された階層の窮乏と社会的排除などの現象と同根である。私たちは朝鮮戦争を、人間の尊厳を奪うこうした世界資本主義、その政治的表現である国際的軍事対決体制という枠内で見べきであるし、朝鮮半島はもちろん、全世界の恒久

的平和秩序の構築と人権の実現という展望を見失わずに、その否定的遺産を清算する道を探さなくてはならない。
(三六三頁、傍点部引用者)

『朝鮮戦争の社会史』の第II部「避難」で書かれているように、朝鮮戦争時、李承晩はいかなる方法を動員してでも大韓民国という国家を守ることに、さらには北朝鮮を含む朝鮮半島において権力を掌握することが最善だと確信していた。そのため戦争の過程において、備えのない国民と軍隊が負わなくてはならなかった犠牲と苦痛に対する、「過程の責任」のすべてを免れようとした。それゆえに、六・二五、朝鮮戦争勃発後には我先に避難し、九・二八、ソウル収復後には避難せずにソウルに留まった国民をパルゲンイ(アカ)と疑い虐殺した、李承晩に国民は存在しなかった。繰り返し言えば、組織として国家は存在したが、そうした危機的状况において国民は存在しなかったのだ。国家の無責任性、李承晩の無責任性はそのマキャヴェリ的人格にも起因するが、構造的に見れば、当時の韓国の国家自律性(state autonomy)の限界に起因するものであった(一四四―一六九頁)。

「避難社会」としての韓国社会における、国家と国民、すなわち領土または組織としての国家と、国民としての国家の乖離が克明に現れるなかで、国家に見捨てられた

国民が被った犠牲を、また「朝鮮戦争の過程で民衆が受けた悲惨さと人間の尊厳の毀損」を構造的に捉えれば、それはまさに排除である。

排除としての虐殺は、軍事独裁政権が続いた韓国社会においても繰り返されたし、先述したように、東アジア化して捉えれば、それは韓国民衆の犠牲のうえに成り立っている(日本的資本主義体制)が必要とした排除でもある。より具体的に言えば、一九七九年一〇月、朴正熙暗殺後、ソウルの春を迎え、韓国全土で民主化を求める気運が高まるなか、軍事独裁国家としての大韓民国の国家自律性が危うくなつた時に、全斗煥が引き起こした一九八〇年五月の光州の虐殺も、構造的に見れば排除であり、その排除のうえに同時代の日本社会は経済の新しい由主義化を遂げているということだ。

朝鮮民衆が被ってきた虐殺を排除と構造的に捉える時、戦後日本社会といまだ終わっていない朝鮮戦争は直接的に繋がるし、朝鮮戦争の痕跡のうえにある「戦後」「日本」「社会」の在り方が鮮明になるだろう。とどのつまり、私たちは朝鮮戦争の痕跡が残る社会に生きており、世界資本主義体制および国家間システムの枠内で見た時、戦後日本は朝鮮戦争をし続けてきたのだ。

ここからさらに、この朝鮮民衆が被った虐殺を排除と構造的に捉える視点を反転させて今日状況を捉え

暴力 燦 燦

す時、私たちは、朝鮮戦争における虐殺をより身近に感
覚することができないのではないだろうか。すなわち、虐
殺を排除と捉える視点から、逆に、排除を虐殺と捉え返
す視点である。

周知のように、米国はこれまで誰の目にも不当な戦
争・占領を動力として資本主義体制を維持してきたし、
今日その（米国的資本主義体制）は自壊を迎えている。
今日、その自壊の余波はグローバルに波及して世界的な
不況となり、グローバル規模での派遣切りが起きてい
る。日本社会でも同様に、ネットカフェ難民、派遣社員
切り、後期高齢者医療制度（正式名称は「長寿医療制
度」）など、さまざま排除が起きている。

資本主義的市場経済が破綻し、国家自律性あるいは企
業自律性が危うくなるなかで発動している暴力を、虐殺
と捉えること。ネットカフェに駆け込むしかない日雇い

労働者、契約を打ち切られて家を失い派遣村に駆け込む
しかない派遣社員の姿を、避難と捉えること。これは単
なる比喩ではなく、金東椿氏が指摘しているように、戦
争と貧困を別個のものとしてではなく、そのふたつを世
界資本主義体制および国家間システムの枠内で見た時に
可視化しうる、または感覚しうる暴力の質なのである。

ネットカフェ難民・派遣社員・後期高齢者の排除を虐
殺として捉える時、朝鮮戦争時の社会の在り方を「避難
社会」と定義する金東椿氏の言葉を借りながら、現在の
日本国家の在り方を次のように翻訳することができると
ろう——現在、組織として国家は存在しているが、国家
自律性あるいは企業自律性の危機的状況のなかで排除さ
れたネットカフェ難民・派遣社員・後期高齢者は、もは
や国民としては存在していない、ゆつくりと虐殺されて
いると。さらには、朝鮮戦争を日本化しながら、虐殺を

白順社

社会運動の 昭和史

語られざる深層

哲 晃 學
藤 上 井
加 伊 井

★4200円

昭和というクライシス、共産主義運動の闇を照射する。
「党創立記念日」という神話*加藤哲郎 中野重治と神山茂夫
*栗原幸夫 特高と機密費、革命家とスパイ*くらせみきお
尹基協射殺事件の真相 付・尹基協伝*朝倉授 三宅鹿之助
と李載裕*井上學 満州の共産党と「満鉄マルクス主義」*松
村高夫 戦後共産党再建期の天皇制問題*伊藤晃 戦後・非
合法奄美共産党の証言*松田清 闇に消えた非合法沖繩共産
党の証言*大峰林一 新左翼の源流・全学連からブント*蔵
田計成 日本共産主義運動史研究・最近の一〇年*田中真人

次のように定義することができる——虐殺とはすなわち、ほかでもない、この戦後日本社会に残る朝鮮戦争の痕跡を掘り起こしていった時にたどりつく、暴力の根源であると。

朝鮮戦争における虐殺を排除と捉える視点から、ネットカフェ難民・派遣社員・後期高齢者の排除を虐殺と捉える視点へ。そして、戦争と貧困を別個のものとしてではなく世界資本主義体制および国家間システムの枠内で共に見ながら、虐殺と排除、その両者を構造的に貫通して捉える視点へ。私はこの視点を、すでに切れてしまった（かもしれないが絶対に切れようがない）朝鮮戦争と日本社会との関係を繋げ直す回路として提起したいと思う。日本社会が北朝鮮と向き合うための、在日朝鮮人と向き合うための歴史感覚と政治感覚を再生する出発点となることを願いつつ。また今日、小林多喜二の「蟹工船」を愛読している数十万の読者たちが、自分たちが被っている暴力を可視化する契機となることを願いつつ。

むすび

北朝鮮への情性化したバッシングが続き、新たな人種差別主義が立ち上がるなかで発動している、今ここに暴力を可視化するための距離としての言葉を求めてみた。腑抜けの暴力。私は現在の日本社会に蔓延してい

る暴力をそう呼びたい。そして、朝鮮戦争と出遭い直すことで、あるいは朝鮮戦争を日本化することで、戦後日本社会に残る朝鮮戦争の痕跡を掘り起こし、歴史感覚と政治感覚の再生とともに、腑抜けの暴力を解く契機を見出したいと思う。

腑抜けの暴力はあくまでも腑抜けである。だから、そう恐くはないと思いたい。たしかに、新たに立ち上がった人種差別主義者たちが集団でデモンストレーションを行っている様は不気味で恐いのだけれど、一対一で対面した場合、彼／彼女らはさほどたいしたパフォーマンスもできないのではないか。だが、それよりもほんとうに恐いのは、たとえ今は腑抜けの暴力であっても、それが常態化して日本社会の空気となっていく時だ。それはより深刻な暴力にも繋がりをからだ。

現在、日本の彼方此方で、野宿者のブルーテント村が行政の施策のもとで強制的に撤去されている。東京・隅田川の川べりにおいては、背後地の市街地再開発と民間のマンション建設と連動した「スーパード堤防」と呼ばれる整備が進むなかでテントは減っていった。なかでも、隅田川の流域である墨田区（土木課）は、「テントゼロ計画」のもとで川べりのテントを強制的に撤去している。

二〇〇五年七月一三日、墨田区大横川親水公園で、あ

暴力燦燦

たかも区の推し進める「テントゼロ計画」に呼応するようにして、高校生が野宿者を蹴り殺す事件が起こった。高校生が殺人を犯した理由は、「むしゃくしゃしていたのでホームレスを狙った。ホームレスなら殺しても構わないと思った」からだという。

この殺人事件に象徴されるように、「ホームレスなら殺してもいいと思った」「ホームレスなら誰でもよかつた」と本気で思っている野宿者を襲撃する子供たちがいる。子供たちによる野宿者襲撃事件は、一九八〇年代初めから現在まで日本の彼方此方で頻繁に起きており、時には殺人にまで至っている。

子供たちによる野宿者襲撃事件から私たちが真摯に考えなくてはならないのは、野宿者のブルーテント村を強制的に撤去する行政の施策として行使されている暴力と、野宿者を襲撃する子供たちが行使してしまっている暴力は、同じ質の暴力であるということだ。そのふたつの暴力は別々の事象ではなく、入れ子構造のようにして、この社会に顕在／潜在している。殺人にまで至っていることを鑑みる時、野宿者に対して行使されている暴力は、差別や排除といった言葉では言い表せないものだ。それはいわば、野宿者に対する構造的虐殺である。月並みな言い方かもしれないが、子供は大人の鏡だ。子供たちは大人たちの真似をして成長する。子供たちが

野宿者に対して行使する暴力もまた、大人たちが野宿者に対して行使している暴力を真似したものだ。当然のことながら、子供たちは生まれながらに野宿者のことを差別してきたわけではない。あくまでも、「ホームレスなら殺してもいいと思った」「ホームレスなら誰でもよかつた」という感覚、暴力に対する無感覚は、大人たちに教育されたものだ。つまり、子供たちによる野宿者襲撃事件は、日本社会で大人たちが野宿者を暴力的に排除する様を、子供たちが目の当たりにしながら育つ過程で、その暴力を純粹に鵜呑みにしてしまった結果、起きてしまっているのである。暴力が常態化し、社会の空気となつて漂いはじめた時、このような惨劇は起こる。

北朝鮮や在日朝鮮人をはじめとする在日外国人に対して行使されている暴力においても同様である。たとえ今は腑抜けの暴力であつても、それが常態化してこの社会の空気と化した時には、「北朝鮮の人民なら殺してもいいと思った」、「在日なら殺してもいいと思った」、「外国人なら殺してもいいと思った」といった事態は起きかねない。とりわけ、日朝の間に国交が結ばれないまま、戦後未処理問題が棚上げされている状態で、日本社会の大人たちが北朝鮮に向かって発動している暴力に対して、子供たちはもはや致命的なまでに無感覚なのではないだろうか。将来的に日朝国交正常化を見通す時、子供たちが

が北朝鮮の人民と出遭った際にどのようなことが起こりうるか――。

関東大震災における朝鮮人虐殺を想起すれば、それはけっして白昼夢ではない。他人事ではない。当時、「朝鮮人なら殺してもいい」と思った」「朝鮮人なら誰でもよかった」と本気で思つて朝鮮人を虐殺した大人たちがいた。

大地震発生直後、「朝鮮人が火をつけた」「井戸に毒を入れた」という流言を口実に戒厳令が布かれ、官民一体となった朝鮮人への迫害とその帰結としての虐殺が始まった。殺された人間の数は七千名とも言われるが、日本政府が一切調査しようとしなため、その実数は今もって定かではない。日本政府は朝鮮人虐殺に対するいかなる真相究明も補償も行わず、虐殺者である自警団や官憲はその後もものさばつて生き続け、虐殺の責任はなんら果たされないまま現在に至っている。

大人たちが他者に向かつて行使した虐殺の暴力に対する責任の取り方、その暴力の解き方を知らない社会のなかで子供たちは育ってきたし、その状況は今も変わらない。私の身体感覚にもとづいて、誤読を恐れずに言えば、この社会には依然として、ウシロカラササレル、背後が気になって仕方がないような身体の緊張があるし、虐殺の暴力が空気として漂っている。

そんな今日の日本社会の空気を読みながら、私がこのむすびで紡ぎたい最後の言葉は、次のような直截で陳腐な言葉である。

「外国人を差別しないでください！」――これは今年の六月に東京で観た、東京南部の日系ラテンアメリカ人出稼ぎ労働者を中心とするバイリンガル劇団「セロ・ウアチパ」の民衆演劇「テオドル・ウアマンの物語」のラストシーンで、役者たち全員が両腕を前に広げて訴えるように叫び続けた言葉である。この劇は、日系ラテンアメリカ人出稼ぎ労働者の過酷な現実を表現したものでしたが、そこには、悲壮感を越えたユーモアと力強さがあった。観劇した後、「セロ・ウアチパ」の役者たちの身体から、勇気をもらっている自分がいた。そして、「外国人を差別しないでください！」、私はこの言葉を久しぶりに（ほんとうに久しぶりに）聞いた時、身体力が抜けながら、腑に落ちるものがあつた。ああそうだ、いまこの言葉こそが求められているのだと。「外国人を差別しないでください！」と叫ばなければならないのが、いまこの国で外国人として生きることの現場なのだ。

指紋押捺制度の復活や入管法改悪など、法務省入国管理局は現在、「テロ対策」を口実にしながら、外国人に対して露骨に差別の暴力を発動している。さらには、指紋押捺や在留カード携帯義務の対象者から特別永住者を

暴力 燦 燦

外すことで、反対運動を狡猾に分断している。かつての指紋押捺拒否闘争の功績は雲散霧消してしまった。在日朝鮮人のなかでも特別永住者とそうでないものとが分けられることで、バラバラに分断させられてしまった。私たちは、バラバラな状態でより強圧的に制度化された差別の暴力に直面している。

果たして、法務省入国管理局による法の暴力と、世界的な不況下で新たに発動している人種差別主義の暴力との間には、どれほどの距離があるだろうか。そのふたつの暴力もまた同じ質の暴力として、入れ子構造のようにこの社会に顕在／潜在している。法務省入国管理局と新たに立ち現れている人種差別主義は同じ穴の貉だ。だから、「在日特権を許さない市民の会」をはじめとする人種差別主義者たちは、現在の日本国家そのものの姿でもある。ある意味で、人種差別主義者たちの存在は国家に

よって守られているような状態だ。人種差別主義の暴力が常態化し、この社会の空気と化してゆくのは、時間の問題かもしれない。

もしも、私たちが連帯して、かつての指紋押捺拒否闘争のような運動を復活させることができるとすれば、「外国人を差別しないでください!」、まずは、この直截で陳腐な言葉に立ち戻る必要があるし、ここが出发点なのだと思う。しかし翻って言えば、この直截で陳腐な言葉を叫ばなければならぬ今ここが、常識の歴史を失ったまま、腑抜けの暴力が蔓延している今日の日本社会の現住所である。私たちははや叫ぶしかないだろう。この社会の未来を見据えながら、叫ぼう。両腕の前に広げて、ユーモラスに、そして力強く――。外国人を差別しないでください! 外国人を差別しないでください!

得

